

歯 科 健 康 診 査

動 向

平成19年度は、20団体13035名に対して歯科健康診査を実施した(表1)。例年に比べ受診団体数は2団体増加し、受診者総数も約200名増加した。

検診項目としては、昨年度から導入したCPI (Community Periodontal Index)方式の歯周病検診を継続して実施した。また、ブラッシング指導用の歯ブラシの配布も継続して行い、歯科健康管理意識を向上させる試みを継続して実施した。

方 法

問診票を用いた予備調査(症状・受診の有無、生活習慣など)と基本的口腔内診査(う蝕の有無、歯科治療の有無、歯の欠損、粘膜疾患、清掃状態など)およびCPI測定を行った。CPI測定はWHOにより国際規格化された専用のプローブ(CPIプローブ:検査用探針)にて、指定された数部位の歯周組織の状態を調べることで口腔内全体の歯周組織の状態を推定することができる指標であり、集団を対象とした場合に効果的な方法である。

口腔内診査の後、口腔清掃状態(プラークコントロール)に問題がある場合には、ブラッシング指導用歯ブラシを手渡し、実際に指導を行った。

結 果

1. 受診者の概要は、20歳代および30歳代が大半を占めていた(前年度と変化なし)(表1)
2. 男女比は4:1で男性が多かった(表1)
3. CPI検査結果(表2)

歯周組織が健全と考えられた者は全体で38.5%であり、これは前年度比で微増であった。歯肉炎(13.8%)、歯肉炎+歯石あり(43.0%)、歯周炎(4.3%)、重度歯周炎(0.3%)という結果は前年度に比べて大きな変化はなかった。

4. 歯の状態について(表3)

歯の健康程度については、歯科治療が必要と考えられた者が37.8%と多かったが、これは前年度から比べると4.4%減であった。また複数本の要治療歯を有する者も昨年度同様2割近くに上った。

5. 総合評価(表4)

総合評価では、要治療者が6ポイント減少し、治

療中の者も昨年度6.6%から7.1%と微増していた。異常なしの判定は18.4%と1%の微増にとどまっていた。

総 括

口腔内の状況は前年度に比べると、全体として若干の改善が認められたと評価できた。

成人の歯科疾患は歯の疾患(う蝕)と歯肉の疾患(歯周炎)が2大疾患であるが、どちらも自然治癒はなく、発症してしまうと(正しく治療し、管理したとしても)一生付き合っなければならない慢性的な疾患であることを鑑みると、口腔内の状況を少しでも改善できたことは評価に値する。

口腔健康管理の方略からすると、社会人は2つのグループに分けて考えるのが一般的である。歯科疾患の認められない健康グループと歯科疾患の既往を有するグループの2つである。

健康グループに対しては歯科疾患の予防が主要なテーマであり、それには日常的なプラークコントロールと定期検診による疾病の早期発見が重要である。

既往グループに対しては治療(通院)を勧めるのは当然として、治癒を目指すのではなく管理に主眼を置くことを優先し、定期的な通院および毎日のセルフケアの徹底により再発防止もしくは疾病進行の鈍化を図ることが望ましい。

本協会による歯科健康診査は健康グループに対しては健康への意識を高め、積極的な口腔管理のきっかけになることが期待でき、既往グループに対しては継続的なモチベーションの維持の役割がある。

近年、高齢者の栄養の問題が注目されるようになってきており、高齢者の相当数が栄養摂取に問題があることが判ってきている。歯の健康は高齢期に入ってから始めるのでは遅い。青年期、中高年期における口腔健康管理が、これからの超高齢社会における重要な予防医学のストラテジーになる。

歯科検診部門は、クライアントの将来も見据えた健康管理のお手伝いを今後とも継続してゆく所存である。

関係の集計表は115頁に掲載